

ブルーエゴナク『バスはどこにも行かないで』REVIEW

何処にも辿り着かない昏く明るいバス旅の先に

時間の経過、それをどう体感するかは個人差の大きいところだと思う。が、「10年」と言えば人、集団、環境などに相応の変化があってしかるべき「時の塊」だろう。

2022年10月7日～9日、北九州芸術劇場 小劇場で上演された『バスはどこにも行かないで』は、劇作家・演出家、時に俳優でもある穴迫信一が代表を務める劇団ブルーエゴナクの10周年記念作品だった。筆者は2011年12月、枝光本町商店街アイアンシアターでの北九州、福岡、熊本、大分の若手集団が短編を上演する九州若手規格「ムニムニ」というイベントで偶然、正式に劇団化する前のエゴナク作品『年頃、』を観ている。なので10年の塊より少しだけ長く、この劇集団と交流があり、全てとは言えないが以降も相当数のエゴナク公演と穴迫が関わる外部の企画・上演を追いかけて来てしまった、ようだ。そんな時間をざっと振り返るだけで、少なからぬ感慨はある。

「時間」は、また、穴迫作品にとって重要なモチーフの一つだ。

穴迫作品の作中の時間は、その軸ともども奇妙に捻じれていることがままあり、現在と過去、現実と虚構、生と死とが日常とは別の法則で結び合わせられる。

『バスはどこにも行かないで』でも、同じ家に住んでいながら会えなくなった白川と初美の兄妹や、現在の自分を見失って若返ってしまった（ように見える）老女・まえことアルコールに溺れる息子・牛朗、生死や血縁の境界に滑り込む青年・漠、それら人々と状況の間でピンボールのように行き来するピアスに加え、牛朗と別居中の妻・佳子や右往左往する人々とは少し異なる時空にいるらしい朝ノ日といった人々を、時間法則を超越して走るバスが時に出会わせ・結び・時には引き離しながら、物語を紡いでいく。

妹と会えなくなった白川が、妹を見かけたバスの始発に連日乗っての捜索行に、彼の恋人ピアスが同行するシーンが事の発端。あらゆる方向に“はっきりしない男”白川への不満と不安から、ピアスは強引なプロポーズに出る。が、屁理屈だけは一人前の白川にあっさりかわされ、乗り合わせた泥酔客＝牛朗へのプロポーズにシフトする。

そんな強引に過ぎる展開を、コミカルなダイアログと思案に満ちたモノローグを絶妙に掛け合わせながらドラマを転がす、その手つきや、バスでのやり取りを遡ってのことらしいピアスと漠とのクラブでの出会い、そこに漂う今どきな厭世観を巧みに言語化するところなどは穴迫作品の大きな魅力だろう。

さらに、そこに牛朗の母・まえこが往還する現実から乖離する記憶（過去）の世界や、ピアスと白川兄妹が出会った学生時代のいきさつなど、作品の進行に伴って幾重にも時間の層が重なり、そのパラレルな時間の層を傍らの高みから眺めるような不思議な感覚で、観客は束の間の異次元旅行を味わうことになる。

いつかは必ず終わる、それも思いがけない形で終わってしまう命ひとつを携えて、人は無

為の時間を生きている。その様は年齢や肩書に関わりなく必死で滑稽で、みっともなくも愛おしい。『バスはどこにも行かないで』の登場人物たちはそんな、人の避けがたい「さだめ」を在り得ない不器用さでチャームに体現する。

ふと思い出したのは、エゴナクが 2017 年 11 月に小倉の GALLERY SOAP で上演した『訪れないヒのために』のことだ。学校にも世の中にもどうにも上手くなじめない女子たちが繰り広げる「闘い」と、「不死」という通常の時間の流れから切り離された状態が彼女たちに与える変化と影響。一步間違えば暗くも重くもなりそうな素材やテーマを巧みに組み合わせた先、穴迫と四人の俳優（女性）は舞台上に驚くほど開放的な風景を立ち上げた。終幕近く、女子たちが旅する先で見たものは、もしかしたら『バスはどこにも行かないで』の劇中を走り続けるバスの、窓外の風景と重なるところがあるのではなかろうか、と、思ったりもする。

肉体を持たない登場人物の台詞を舞台奥の壁に映写し、俳優がその言葉と対話したり、観客がそれを読んでイメージを膨らませる趣向も効果的で、具象と心象、言葉と音声の役割が入れ替わるような瞬間は、存分に想像した者ほど楽しみが増えるという演劇の基本原則をポップに再認識させてくれた。モノログとダイアログを巧みに使い分け、戯曲の中に音楽的なうねりを生み出す穴迫の感性も存分に発揮されていた。

思えば『訪れないヒのために』は、エゴナクの 10 年の活動のちょうど半ばに生まれた作品。ならば『バスはどこにも行かないで』は、続く 5 年でも着実に、表現のための武器を増やしていった穴迫とエゴナクの最新の成果と言うべきだろう。

戯曲を紡ぐ言葉の研ぎ澄ませ方、生の輝くばかりの喜びとそれを失っていく身体の変化を表現するフィジカルのトリッキーでユニークな使い方、日常的な風景から幽明のあわい、さらには世界をとてつもない高みから俯瞰したり逆転させたりする軽やかな視点の飛翔。それら表現に繊細に寄り添う有馬和樹（おとぎ話）のメロディと歌声がまた、劇世界の奥行きを広げる。

そうして穴迫とエゴナクの仲間たちが演劇的に捉え直したこの「世界」は、誰もがわかり過ぎてうんざりしている空虚さの先に、微かな光明が隠されているのではないか、と語り掛けてくる。

さて、10 周年の劇団本公演の先は、継続的に続いている岩手での創作を高校生とともに展開し、年明け 2023 年最初の創作は、22 年度から拝命した京都・THEATRE E9 KYOTO の第 3 期アソシエイト・アーティストとしての第一作『Doudemoii shi』だ。3 年間、E9 で創作するために穴迫が掲げたテーマは「ここは彼方 (Here Is Beyond)」で、今自身の眼前に広がる社会・世界への諦念のような感覚によって変容した死生観のその先を、また時間を超越した劇世界に解き放つのではないか、と、作品を予告する文章から勝手に妄想する。

どこにも辿り着くことのないバスの昏く明るい旅の先には、乾いた筆致のユーモアさえ交え、とことん「死」を客観視するようなドラマが生まれるのだろうか。

穴迫信一とブルーエゴナクの、10 年を越えたさらなる先の一步を目撃するためには、刺

さるような厳しい京都の冷気に身を浸さざるを得ない。だが恐らくは鴨川河畔に立つ THEATRE E9 KYOTO での観劇に、その冷気を吹き飛ばして余りある興奮を感じられる予感が今、確かにある。

Text : 尾上そら